

は払われていない。本書は地域研究を一般化して論じているような書き方がされているが、実際には第二次世界大戦直後のアメリカの敵国研究としての地域研究に限定された議論を行っている。

地域研究は、敵国研究に1つの起源を持つとしても、マレーシアや日本を含む各国でそれぞれ発展を遂げてきた。比較的新しい学問分野で定義が十分に定まっていないことにも助けられ、地域研究は隣接分野を次々と取り入れて膨らんでいくことで内なる多様性を増すとともに、その中から地域研究のコア的なものを打ち立てようとする動きと相まって、地域研究はあたかもそれ自身が1つの生き物であるかのように成長し続けてきた。その過程で、地域を閉じたものと捉えることの問題を自覚した上で、地域と切り結ぶ研究を目指すという積極的な意味を込めて地域研究を名乗る研究も行われてきた。地域研究を本質的に捉えずにその絶え間ない混沌性に向き合おうと藻掻くことこそ、慣れ親しんだものを異化することで国民国家概念の軛から解放されるとスピヴァクの議論に希望を見出そうとする著者の方法と通じ合うものがあるように思われる。

研究対象の認識と著者の認識が交錯する本書を読み解くのは一筋縄ではいかないが、著者の研究者としての生きざまが刻み込まれているような読みごたえがある。序説に続く本論でさらにどのような議論が展開されるのかに期待している。

(山本博之・京都大学東南アジア地域研究研究所)

参考文献

- Ariffin Omar. 1993. *Bangsa Melayu: Malay Concepts of Democracy and Community, 1945–1950*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- アンダーソン、ベネディクト。2005。『比較の亡霊——ナショナリズム・東南アジア・世界』糟谷啓介；高地薫ほか（訳）。東京：作品社。

小野真由美。『国際退職移住とロングステイツーリズム——マレーシアで暮らす日本人高齢者の民族誌』明石書店、2019、284p。

本書は、文化人類学の民族誌的アプローチを用いて、退職後の日本人高齢者のマレーシアへの移住やメディカルツーリズムを含むロングステイツーリズムを、マレーシアと日本の観光戦略についての考察や、当事者へのインタビューに基づく事例分析によって明らかにしようとする試みである。なお、本書は観光学術学会2020年度著作賞を受賞している。

本書は、7章から構成される。

第1章「序論——高齢者の国際移動を捉える視点」では、「グローバルな人の移動」を対象とした従来の移住研究や観光研究、とりわけ、本書の事例に相当する「国際退職移住」に関する先行研究を検討し、人の国際移動に関するマーケットの役割も加味しつつ、本書の視座と目的が述べられる。本書の特色は、国際退職移住に関する研究から生まれ、観光と移住の中間領域を捉える概念である「ライフスタイル移住」を主な対象としている点にある。「ライフスタイル移住」とは、「すべての年齢の比較的裕福な個人が、生活の質を向上させる場所へ一時的あるいは恒常的に空間的に移動すること」(p. 30)である。

第2章「国際退職移住の商品化——ロングステイツーリズムの成立」では、送り出し国である日本社会の状況や日本人の国際移住の歴史、グローバル化の進展に伴う観光現象などの様々な観点から、少子高齢化が進む日本社会において高齢者の国際移動が発生する社会経済的背景を考察している。著者は、日本人の国際移動の歴史を、1) 明治期の「出稼ぎ」、2) 帝国主義下における「植民」、3) 日系企業の海外進出に伴う日本人駐在員、4) 1980年代から顕著になる留学やワーキングホリデー、ロングステイという4段階に分け、4) は、個人の選択や意思決定が重視される社会状況が反映されていると指摘している。後半では、特にマレーシアにおけるロングステイの商品化のプロセスを、南欧やオセアニア、タイやフィリピンなどの東南アジア、台湾といったマレーシア以外の事例と比

較検討しながら概説している。

第3章「ホスト国マレーシア——ゲストをめぐる選別化の論理」では、マレーシア側の戦略に焦点を当て、移民の歴史の変遷、在留日本人社会の歴史と現状、観光振興政策などが述べられ、外国人退職者の受け入れ制度である「マレーシア・マイ・セカンド・ホーム・プログラム (MM2H)」の詳細が説明されている。マレーシアの外国人退職者の受け入れ制度は、(開始年に諸説あるとされるが) 1996年に「シルバーヘア・プログラム」として開始され、2002年3月に制度を見直し、後継の制度としてMM2Hが実施されている。後半では、日本人のロングステイ滞在地としてマレーシアの人気の上昇した要因を、マレーシア政府の観光戦略、他国と比較した場合のロングステイに関する制度的優位性、日本各地で開催されたロングステイセミナーなど、具体的な事例を示しながら解説している。

第4章「『渡り鳥』型のロングステイヤー——キャメロンハイランドの事例から」では、マレー半島のパハン州に位置する高原リゾート地キャメロンハイランドにおいて、数日間から3カ月程度の滞在を繰り返す「渡り鳥」型の日本人長期滞在者の事例を分析している。前半では、松本清張の小説『赤い絹』の舞台として知られるキャメロンハイランドが日本人高齢者の滞在地となっていた過程を、日本人高齢者の互助組織である2つの団体(キャメロン会とキャメロンハイランドクラブ)の日本国内での啓発・普及活動を示しながら明らかにしている。ゴルフやテニス、トレッキングなどの様々なレジャー活動が体験できるキャメロンハイランドは、月15万円程度で暮らせるリゾート地として紹介されたことを契機に日本人高齢者に注目されるようになった。ベナン島やクアラルンプールなどの都市部に比べると、生活費が安いことが魅力の一つであるという。本章では、ホテルやコンドミニアムに単身および夫婦で滞在している様子や、現地社会との交流の様子が、日本語教室や盆踊り大会における参与観察や滞在者へのインタビューを交えて詳細に記述されている。後半では、キャメロンハイランドでの長期滞在について、「渡り鳥」型の滞在では日本人コミュニ

ティを形成することが難しいことや、滞在者間の経済格差やライフスタイルの違いなど、いくつかの問題点が指摘されている。

第5章「『定住』志向のセカンドホーム——クアラルンプールの事例から」では、「渡り鳥」型のような避暑避寒のためのリゾート地滞在と異なり、主にMM2Hにより長期滞在ビザを取得した人々を取り上げている。2007年頃になると、マレーシアでは定住目的の長期滞在者が増加し、生活上の利便性が高いクアラルンプールに注目が集まるようになった。5年間あるいは10年間のMM2Hビザを更新しながら長期滞在する定住志向の人々は、自らを「セカンドホーム」と呼ぶ。本章では、MM2H促進活動など「セカンドホーム」たちの活動の拠点となっているクアラルンプール日本人会を中心に、関係者へのインタビューなどを通して、滞在の動機や実際のライフスタイル、人間関係や介護の悩みや将来への思いなどを紹介している。

第6章「ケアの越境化」では、長期滞在者が高齢の親や障害のある家族、あるいは自らの治療や介護のために行なうケア・マイグレーション(介護移住)という新たな局面を取り上げている。前半では、ケア・マイグレーションを3つの類型に分けて(①健康促進・美容目的の国際移動である「ヘルスツーリズム」、②治療を求めた国際移動である「メディカルツーリズム」、③高齢者の介護を求めた国際移動)、タイやシンガポール、フィリピンやインドネシアなどの事例を紹介した後、1997年の通貨危機以降、メディカルツーリズムに着目したマレーシアの事例を詳述している。後半では、マレーシアにおいて日本人専用高齢者介護施設をつくる試みを取り上げ、ケアの越境化という視点から、日本人高齢者のマレーシア移住の意味を検討し、国際退職移住を実践する日本人の自律的な生き方について考察している。ちなみに、本章では、インドネシアのバリ島に長期滞在した車椅子生活者「大村しげ」が紹介されている。このことは本章には書かれていないが、国立民族学博物館には、京都での日々の暮らしの中で蓄積された生活財すべてを集めた大村しげコレクションが収蔵されている。個人的には、大村しげの別の側面が垣間見られ、新たな知見を得ることができた。

第7章「結論」では、本書での議論を振り返りつつ、第4章から第6章のそれぞれのトピックについて、考察が加えられている。著者は、国境を越えて移動する人々自身がMM2Hなどの移動を発生させるシステムに大きく関与していることが、日本人高齢者の国際退職移住とロングステイターリズムの特長であると指摘し、本書は、従来の「トランスナショナルリズム論が扱ってこなかった消費者としての人の国際移住の市場性を捉え、外国人誘致政策を実施する国家、国際移動の商品化を担う産業、消費者としての移動主体の相互作用により、ライフスタイルが生産、再生産されていくことを明らかにした」(p. 258)と述べている。

本書で紹介される個々の事例はそれぞれが興味深く、それが本書の大きな魅力となっていると言ってもよい。ただし、事例の中には、もっと深く掘り下げてみたらよいのではと思うものも多々あった。特に、第4章のキャメロンハイランドの「渡り鳥」型と第5章のクアラルンプールの「定住」型の事例は、インタビュー対象者の語り自体に深みを感じられず、読んでいて消化不良になることが多かった。しかしおそらく、これは著者の調査の手法やインタビューに問題があったのではなく、マレーシアに滞在する理由として、ゴルフを楽しむため、生活費を安く抑えるため、避暑避寒のためといった以外の語りがあり見られず、そこから論点を抽出できるほど、日本人高齢者たちの背景が複雑ではなかったということに起因しているのではないだろうか。一方、第6章で紹介されている「介護移住」の事例は、認知症や体の不自由な要介護者の切実な問題を扱っていて、深く考えさせられる内容であった。

マレーシア研究、東南アジア地域研究の観点から気になったのが、著者の考察の対象が、マレーシア社会というより、マレーシアの「日本人コミュニティ」であり、そのコミュニティに属する「日本人」であるということである。本書では、「日本人」に焦点を当てあまり、日本人高齢者が現地と交流しているマレーシア人へのインタビューや、マレーシア人が日本人高齢者をどのように見ているのかといったまなざしについての言及が少ない。例えば、キャメロンハイランドのジャングルト

レッキングの事例では(pp. 132-133)、ゴルフ場のキャディをしているオラン・アスリの青年に道案内してもらい、オラン・アスリの村を訪問することが紹介されているが、実際にどのような交流があったのか、オラン・アスリの村に対して日本人高齢者たちはどのような感想を持ったのかなどについての記述はなく、オラン・アスリの説明もなされていない。本書から浮かび上がるのは「日本人」や「日本社会」の実像であり、その舞台となっているマレーシアが後景化してしまっていると感じた。

なお、本書は補足調査を含めて主に2012年までの日本人高齢者の国際退職移住を対象としているが(2018年までの状況について著者は把握しているという)、その後の状況が気になるところである。橋詰[2021]によれば、リーマンショックや日本の年金事情の変化、マレーシアの物価の上昇(年金15万円では暮らせない)、滞り者たちの高齢化等の理由で、日本人高齢者の滞り者数が年々減ってきているという。特に、コロナ禍においては、「渡り鳥」型の滞りはほとんど不可能になってしまったという。日本人高齢者の国際退職移住が時代的な一過性のものであったかどうかについて結論を出すのは早計であるが、時々の政治経済的・社会的な事情に左右されやすいものであることは確かであろう。

とはいえ、マレーシアにおける日本人高齢者の国際退職移住の実情を知るには、本書は格好の書である。また、本書はまだ誰も足を踏み入れていない分野の開拓を目指したチャレンジングな内容を有しており、著者はまさにパイオニアである。さらに、マレーシアばかりでなく、他の東南アジア諸国や世界各地の高齢者の退職移住について広く目配りし、グローバルに展開するライフスタイル移住という新しい現象を射程に入れた著者の研究は、人の移動をテーマとした文化人類学的研究に対して大きく貢献するものである。本書で取り上げた日本人高齢者の国際退職移住は、マレーシアの受け入れ制度や観光戦略などによって裏打ちされた、いわばお膳立てされた移住・移動と言えなくもないが、人々の移動の動機はそれだけではないだろう。そうした裏打ちがなくなったときに、

人々はどのような動きをするのか、著者のさらなる研究に期待したい。

(信田敏宏・国立民族学博物館)

参考文献

橋詰直道. 2021. 「マレーシアにおける日本人の高齢退職者の移住——キャメロンハイランドにおけるロングステイを中心に」『駒澤地理』57: 1-22.

荒 哲. 『日本占領下のレイテ島——抵抗と協力をめぐる戦時下フィリピン周縁社会』東京大学出版会, 2021, 240+89p.

複雑に絡み合い二項対立的に単純に理解できない「抗日と対日協力」という問題を中心テーマに据え、レイテ島を対象を絞って、ミクロな視点から日本のフィリピン占領をとらえなおした力作である。「序章」において著者は本書を民衆史として位置づけ、日本軍政期のフィリピン研究においてはこれまでその実績がなかったことを強調している。また著者はこれまでの研究は、ゲリラ組織を階級的な文脈でとらえていないとして批判し、エリート（植民地主義に傾倒した中間知識人階層、メスティーソ層、華人階級）対貧困層という二項対立的な概念ではなく、下位中間層ならびにそれ以下の階級の役割にも着目すべきだとしている。さらに著者は、日本軍政期を経て生じた社会変容として①エリートの政治的地位がさらに強固になったこと、②民衆間の分断状況がさらに顕著になったこと、③貧農階級の社会的地位がいっそう没落したことを指摘し、日本軍政は基本的に戦前からの既存の社会構造を強化する形で終わり、大きな変化をもたらすことはなかった、という解釈をしている。しかしその一方で、この時期には下層の人々が蓄財し、戦後「新興ブルジョアジー」として台頭するなど階級上昇という現象が起こったことにも注目し、さらに政治の暴力化の始まりとなったことなど重要な視点を指摘している。

本書の構成は「序章」と「終章」以外に5つの章から成っている。「第一章 戦前期のレイテ島社

会」では主としてエリートたちの政治的抗争について記述され、社会史的な観察や分析は、農業状況について2頁、教育及び選挙権保有状況について2頁、住民の生活一般について3頁を割いているのみである。

「第二章 日本占領の始まりとゲリラ組織化をめぐる暴力」では、日本軍の軍事占領に対してレイテ島の住民たちがどのように対応し、対日抵抗と協力をめぐりいかに離合集散を繰り返していたかという本書の中心テーマを論じている。レイテ島では、多数の抗日ゲリラが乱立していた一方、日本軍の兵力は小さくて、それに対抗する十分な力はなく、47町のうち日本軍の統制下に入ったのはわずか10町程度であった。しかし反米の立場から、あるいは自分の政治権力を高めようとする意図から、日本軍と協力するフィリピン人もいた。ただし反日であると同時に反米の者もあれば、米軍の支配下にある者もあるなど相互の関係は極めて複雑かつ流動的で、日本に協力すると見せかけ、ゲリラ組織とも連絡を取り合っていた「二重協力」町長もいた。ここでも記述の大部分は政治エリート間の動きに充てられている。

「第三章 町村部における日本占領と住民間暴力の激化」においては、州レベルの占領行政とはかなり異なった様相を呈していた町村レベルの政治状況を克明に説明している。反日ゲリラ掃討に際して町長らが、住民をどのように動員してどのような暴力が発生したか、それに対して住民がどう対応したかが論じられて、エリートの政治的対立の記述から幾分民衆史に近づきつつある。統一的な抗日戦線の構築が困難で、住民間の暴力が激化したことなどが指摘されている。

「第四章 経済をめぐる住民の動き」においては、人流と物流について社会史的側面から検討が加えられている。ここで注目されるのは、貧困層から台頭した企業家による物資調達などを通じて下層の人々が蓄財し、戦後「新興ブルジョアジー」として台頭し、階級上昇という現象が起こったという記述である。ただそれがどの程度普遍的かつ広範にみられた現象であるのかは明確に記されていない。

食糧調達問題、木材の調達や輸送の問題、慰安婦問題などについて触れられている部分は具体的